C 16　調理済み・半調理済み食品の利用実態調査　ー利用に及ぼす影響についてー

大阪成蹊短大○山本友江　新潟大教育　高橋洋子　勝田啓子
広島中央短大　大下市子　山口大教育　五島淑子　山口女大家政　足立蓉子

目的　前報（イメージについて）に引続き、本報では食品グループごとの利用頻度をもとめ、これら食品の利用に及ぼす影響について検討した。

方法　調査時期；前報に同じ　調査項目；調理済み・半調理済み食品（そう菜15種、冷凍食品10種、レトルト食品５種、インスタント食品４種、持ち帰り食品５種、合計39種）の利用頻度を集計し、生活概況（世帯、家族人数、主婦の就業の有無・学歴）、地域、料理上の留意点、イメージとの関連をみた。

結果　①そう菜：頻度の低かったのは家族人数が２人の家庭、専業主婦・農林漁業従事者、山口・新潟の地域、高かったのは自営業・パートタイム従事者と大阪・広島の地域、調理にかかる時間を短縮しようとする家庭だった。②冷凍食品：１品当りの頻度は５つの食品グループの中で１番低いが、いずれの項目も利用頻度に差はみられなかった。解凍の手間・食品の中身・味への不満などの（－）イメージが頻度に関係なく認められた。③レトルト食品：他の食品グループに比べ利用しない人が多く、いずれの項目にも差はみられなかった。④インスタント食品：１品当りの頻度は食品グループの中で１番高いが、いずれの項目にも差はみられなかった。健康への不安・栄養なしなどの（－）イメージが利用している人の中でもみられた。⑤持ち帰り食品：生活概況、地域では差がみられなかったが、調理の際に家族の嗜好に留意する家庭で高い傾向がみられた。頻度の高いグループでは便利・おいしいなどの（＋）イメージがみられた。